The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山形市方言の文末詞の相互承接
Author(s)	渋谷，勝己
Citation	阪大日本語研究. 2016, 28, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55457
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』28（2016）

山形市方言の文末詞の相互承接

Sequencing of sentence final particles in Yamagata Dialect

渋谷 勝己
SHIBUYA Katsumi

キーワード：文末詞、山形市方言、相互承接

要旨

本稿では、山形市方言で使用される文末詞について、個々の文末詞の意味と用法、生起する文タイプ、文中での生起位置を確認しつつ、主に平叙文についての相互承接のあり方を整理する。その結果、当該方言の文末詞は、

① テンス・エビデンシャル等を表すケ
② 判断とのつながりをもった、平叙文にのみ使用される文末詞（判断不確定系のベとガ、判断確定系のジェ、バ、ドレ、モ）
③ 判断と聞き手への伝え方の両者にかかわる汎用の文末詞（ズとヨ）
④ もっぱら聞き手への伝え方にかかわる汎用の文末詞（ネ・ナ、ハ）
⑤ 聞き手への待遇のあり方を示す汎用の文末詞（ス）

といったカテゴリーが取り出され、この順番で相互承接を構成するということを確認した。

1. はじめに

山形市方言では多様な文末詞が用いられている。これらの文末詞について、筆者はこれまで、以下のような形式の意味・用法を記述してきた（刊行順）。

ケ（渋谷1999a）、ハ（同1999b）、ズ（同2000）、ドレ（デ）（同2001a）、ス（同2001b）、（命令形接続の）ナ・ネ・ヨ（同2003）、バ（同2004）、ッダ（同2005）、ベ・ガ・シタ（渋谷他2006）、ジェ（渋谷2008）、テ・ド（同2011）、（疑問文に後接する）ヤ（同2012）

本稿では、これらの文末詞のなかから平叙文のみ、あるいは平叙文にも使用されるものを選び、まだ記述を行っていないいくつかの文末詞を加えて、主に平叙文で使用される文末詞の相互承接のあり方を整理することを試みる。平叙文は、各種文タイプのなかでもっとも多様な文末詞が使用される文タイプである。

以下、2節で各文末詞の用法と文の内部での生起位置を確認したあと、3節で複数の文末詞の

連鎖のあり方を一覧にして整理する。次いで、その整理を踏まえたうえで、4節で山形市方言の文末詞の相互承接の特徴を考察することにする。

なお、筆者のいう文末詞とは、以下のような特徴によって仮にグループ化した形式群である。

（a）主文の末尾で使用されること。

（ただし、文内での生起位置は主文末に限定されないものがある。たとえば、ケやベはカラ節などのなかでも用いられ、ヨ、ハ、スなどは間投助詞としても使用される。また、ッダなどはズやナが後接しないと使用できない文末詞である。）

（b）不変化詞であること。

（c）1モーラであること。

（ッダやドレ、シタは例外となる。ただしドレはデに変化しつつある。）

しかし、これらの特徴には、上のカッコのなかに記したように例外もある。また、テンス等を表すケ（2.1参照）以外の文末詞は基本的には発話・伝達的なモダリティを表すが、その意味・用法は多岐にわたっている。形態的、統語的にもその特徴は多様で、一方にはドレのようにデに形を変えつつ文法化を進めている形式があり、また他方には、本稿では取り上げないが、確認要求のンネ（渋谷2001a）のように独立性の高い付加疑問文的な要素（「ンネは「そうではないか」の意で単独でも使用される）や、アリャ（＜アレ＋ワ、渋谷2002）のような感動詞（これも単独でも使用される）がそれに先行する文の末尾に繰り込まれて文末詞化したようなケースもある（雪が降ったリャなど）。以上のような多様性を踏まえ、筆者の記述では、文法的に（比較的）均質なグループをイメージさせる「終助詞」という用語を避け、その生起位置だけを示す「文末詞」という用語を採用してきた。文末詞の範囲の特定、下位分類、その文法カテゴリーとしての特徴づけなどはさらに検討する必要があるが、本稿ではそのためのひとつのステップとして、渡辺（1968）や鈴木（1976）、田野村（1990、1994）、丹羽（2003）、沖（2015）などが終助詞について行ったような、その相互承接のあり方についての整理を、山形市方言の文末詞を対象として試みるものである。なお、本稿と同種の試みは、以前、渋谷（2006）で行ったことがあるが、本稿はそれに大幅な改定を施している。

2. 各文末詞の意味・用法

本節ではまず、これまでに行った個別の文末詞の記述結果をもとにして、①各文末詞の意味・用法と、②相互承接ということとも関係する、共起する文タイプと文中での生起位置の2点を簡単に確認しておこう。以下の記載の順序は、それぞれの文末詞が文のなかで用いられる場合の順序にほぼ相当する（3節参照）。

なお、個々の文末詞の記述は、おもに、筆者の内省と、既存の談話資料、筆者の収集した談話資料によって行った。筆者は1959年山形市生まれ、1978年（18歳）から東京に、1984年（24歳）から現在に至るまで1年間の海外生活を除いて大阪に居住している。なお、内省を行った際の状況は、次のようである。

（a）共通語にはない形式の文末詞については、（c）に述べるような場合を除いて、内省によってとくに問題なく記述できた。

（b）共通語に同じ形の文末詞がある場合には（ヨ、ネ、ナなど）、共通語の用法と方言の用法の区別がむずかしい（共通語の用法なのか、方言の用法なのか、それとも両者にある用法なのかの区別がつきにくい）。

（c）バについては、当初は内省がむずかしかったが、記述と同時に行っていた「ごんぎつね」を山形市方言に翻訳する作業（井上・吉岡 2004）を通じて作例をストックすることができ、同時に内省も活性化された。バは談話資料のなかではほとんど使用されることがない形式であり、筆者のなかでも摩滅（attrition）が起こっていたものと思われる。

以下、例文については、読みやすさを考慮して、問題の文末詞（および必要な場合にはその前後の部分）のみをカタカナで記し、他の部分は共通語を漢字・ひらがな混じりで記す。一部、先行研究から引用したものを除き、筆者の作例である。

2.1. ケ

2.1.1. 意味・用法

文末詞ケは東京方言でも使用されるが、それよりも意味・用法、文内分布等が広い。動き動詞に下接した場合と状態用言に下接した場合とで意味が異なるので、わけて述べる。動き動詞の否定文は、状態用言と同じようにふるまう。

（a）動き動詞の場合

山形市方言の文末詞ケは、動き動詞のル形、タ形に下接して、「記憶の検索による思い出し（回想を含む）」と「見てきたことの報告」を表す。両用法とも、前接する動詞がル形の場合は基準時（思い起こされている時点や見た時点）における未完了を、タ形をとった場合には完了を表す。

（1）a そういえば太郎はそのころ時々東京に行くケなあ（思い出し）
　　b そういえば太郎はそのころ時々東京に行ったケなあ（思い出し）

（2）（太郎が自分の部屋でちゃんと宿題をしているかどうか見てきてくれと言われたその報告として）
　　a 太郎はせっせと宿題をするケ（報告）

b 太郎はちゃんと宿題をしたケ（報告）

なお、ケは、伝聞等の場合を除いて、次のような、自身が目撃していない事態を述べる場合には使用できない（「*」はその文が不適格であることを表す。以下同様）。

（3）*三矢重松は、1871年に、鶴岡市に生まれたケ（歴史的過去）

また、報告用法のケは、一人称主語文では不適格となる。

（4）そういえばそのころよくあそこでセミを採ったケなあ（思い出し）

（5）*ぼくはちゃんと宿題をしたケよ（報告）

（b）状態用言の場合

状態用言を述語とする文に後接するケは、次のように思い出しや報告を表すほか、

（6）太郎はそのころはまだ元気良いケなあ（思い出し）

（7）（太郎の様子を見てきて）太郎は元気良いケよ（良かったよ。報告）

過去を表す場合もある。

（8）太郎は昨日は元気良いケ

（9）三年前まではここに入るのにお金が要るケ

渋谷（2014）で述べたように、過去の用法は比較的新しいものだと思われる。

2.1.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

文末詞ケは、文の次のような位置で使用される。

（a）平叙文の主文末。

（b）ガモスンネ（かもしれない）などのモダリティ形式の前。

（c）一部の連体節末や、南（1974）のC類従属節の節末。

このうち（b）の位置に現れる文末詞はケだけで、以下に示す他の文末詞とは性格が異なっていることがわかる。ケを文末詞と判断するのに疑問が持たれるところである（終助詞のなかでの「け」の特異性については、分析の対象は異なるが、鈴木1976、田野村1994にも同様の指摘がある）。

2.2. ベ

2.2.1. 意味・用法

「ベ」は基本的に、推量・意志・勧誘を表す（以下、読みやすさに配慮してカッコに入れて「ベ」と記す）。共通語の「う・よう」「だろう」に相当する。

（10）太郎はたぶんそのうち来るベナ（来るだろう。推量）

（11）そんならおれが行くベナ（行こう。意志・申し出）

（12）いい機会だからきみもいっしょに行くべ（行こう。勧誘）

ただし、意志については、動詞ル形で言うのがふつうである。

また、「べ」は、共通語の「だろう」と同じように確認要求を表す形式としても使用され、以下のような用法で使用される（分類は三宅1996による）。

（a）命題確認の要求。話し手にとって真偽が不確実な命題が真であることの確認を聞き手に要求する。

（13）前から思ってたんだけど、おまえ、本当は彼女が好きなんだべ

（b）知識確認の要求。話し手の知識や認識をそのまま聞き手にもちかけて、聞き手にその知識があることの確認を得ようとする場合である（？は上昇調のイントネーションを表す。以下同様）。

（14）あそこに郵便局があるべ？（潜在的共有知識の活性化）

（15）こんなに忙しいときに映画に行けるわけないべ（認識の同一化要求）

2.2.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

文末詞「べ」は文の次のような位置で使用される。

（a）平叙文の主文末。

（b）推量の用法の場合、C類従属節末でも使用される。

2.3. ガ

2.3.1. 意味・用法

文末詞ガは、共通語の「か」と同じように、納得や（「べ」に下接して）疑念、質問などを表す。

（16）あれが花子ガ（納得）

（17）明日、太郎は来るべガ（疑念）

（18）おまえ、あした、学校に行くガ？（質問）

2.3.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

平叙文の文末（疑念・納得）、疑問文の文末で使用される（疑問文はガがなくとも適格である）。その他、ガは、文中において補文標識として使用される。

（19）太郎はいつ来るガわからない（補文標識）

以上、2.2と2.3で述べた（知識確認の要求用法を除く）「べ」とガの意味・用法は、それに先

行する命題が表す事態についての話し手の判断や知識が確定、定着していないことを含意するという意味で、以下（2.11、3.3）、仮に「判断未確定系」の文末詞と呼ぶことにする（「ベ」の確認要求の用法については2.6も参照）。

2.4. ジェ

2.4.1. 意味・用法

文末詞ジェは、［［命題］＋ジェ］のなかの［命題］が表す知識や情報が、聞き手のもっているものとは異なる、正しい、正当な知識・情報であるとして、聞き手に提示するという意味をもつ。したがって、ジェを使用した発話は、会話のなかでは、話し手が、聞き手の発話や行為から伺われる、聞き手の抱いている前提や思い込みが誤りであると判断し、その思い込みを修正しようとする、といった発話意図を担うことが多い（例にA、Bなどとある場合は会話例である。以下同様）。

（20）子ども：あの鉄人28号の人形、買って
　　母親　：あれはジャイアントロボの人形だジェ。いいの？

（21）A：おまえ、あした学校なんだから早く寝なさい
　　B：あしたは日曜日だジェ

会話のなかでは、上の例のように、隣接ペアのなかの第2発話部で使用されるのがふつうである。家族等を除いて目上には使用しにくく、2.9で述べる丁寧のスとも共起しにくい。

ジェは、形式的には共通語で使用される男性語の「ぜ」が口蓋化したもののようにも考えられるが、ジェは当該方言では男女ともに使用する形式である。また、意味的にも、次のような、会話の第一発話部で「ぜ」が使用されるような場合に、当該方言のジェが使用されることはない（＃は語用論的に不適切であることを表す。以下同様）。

（22）ここになにかある｛ぜ／＃ジェ｝（日本語記述文法研究会2003: 248）

（23）そろそろ｛行こうぜ／*行くベジェ｝（同、一部改変）

ジェの意味の特徴は、聞き手の誤った思い込みを明示的に修正するという点にあり、共通語の「ぜ」が持つ、「話し手が認識している内容を聞き手に一方的に伝える」、あるいは、聞き手に「新しい認識を求めたり、その認識に結びつく行為の実行を促すといった働きは強くない」（日本語記述文法研究会2003: 248）といった特徴とは異なっている。

2.4.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

ジェは平叙文の主文末でのみ使用され、従属節では使用されない。

2.5. バ

2.5.1. 意味・用法

文末詞「バ」は、聞き手にたいして、聞き手の未知の情報を伝達する場合に用いられる形式である。その未知の情報とは、話し手が意外性をもって見出した／認識したもので、聞き手にとっても、おそらく聞き手の想定にはない／聞き手の想定とは異なる、聞き手が驚くにちがいない情報であるという点にその特徴がある。

（24）おいおい、おまえを写した写真に霊が写ってるバー

（25）（誰もが不合格だろうと思っている入試の結果を、本人の代わりに親が見に行って、電話で本人に連絡して）おまえ、合格したバ！

2.5.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

バは平叙文の主文末でのみ使用され、従属節では使用されない。

2.6. ドレ（デ）

2.6.1. 意味・用法

文末詞ドレ（縮約してデとなることもある）は、知識確認の要求を表す形式である。具体的には、聞き手の気づいていない現実世界の事物や事態、あるいは、聞き手が（一度は）認識しているはずの、記憶のなかの現実世界の事物や事態について、聞き手にその存在を指し示し（＝現場性、直接経験性、個別事態性が強い）、当該事物や事態に関する知識を共有することを促す。現実世界において生起する事態であるために、話し手は、聞き手の注意を喚起すれば、聞き手も五感や記憶を活性化して、その知識をすぐに共有しうると考えている（上の下線部は、2.2.1で述べた「ベ」や2.12.2で述べるベシタと異なる点である）。

（26）あそこに郵便局がある｛ドレ／ベ？／ベシタ｝（あるじゃない／あるだろう）

ドレはその他、

（27）よう、山田だ｛ドレ／*ベ／*ベシタ｝

（28）あれっ、雨が降っている｛ドレ／*ベ／*ベシタ｝

のように、ある情報が一種の驚きを伴って新規に導入されたことを表す驚きの表示や、

（29）そのスカート、きれいだ｛ドレ／*ベ／*ベシタ｝

（30）（写真を見て）彼女、感じのいい人だ｛ドレ／*ベ／*ベシタ｝

のような弱い確認の要求（「ね」で置き換え可）などにも使用できるが（三宅1996の分類による）、「ベ」や「ベシタ」のような推量起源の形式とは異なって、話し手の仮定や想定にもとづいた事態の確認要求には使えない。

（31）（山形にいて）もしおまえがいま東京にいるとする｛*ドレ／ベ／ベシタ｝

（32）みんな行くんだから、私も行ってもいい｛*ドレ／ベ／ベシタ｝

2.6.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

ドレも、平叙文の主文末でのみ使用され、従属節末で使用されることはない。

以上、ジェ・バ・ドレ（およびまだ記述していないモ）は、それに先行する命題が表す事態についての話し手の判断や知識が確定していることを含意しているという意味で、以下（2.11、3.3）、仮に「判断確定系」の文末詞と呼ぶことにする。

次に、2.7～2.9において、平叙文だけでなく、疑問文や命令文、勧誘文などでも使用される汎用の文末詞を整理する。

2.7. ズ

2.7.1. 意味・用法

文末詞ズは、命題内容を聞き手に押し付ける（インポーズする）」といった聞き手目当ての発話・伝達的なモダリティを担う形式である。平叙文で使用される場合には、「話し手の意見や意向はすでに確定している、話し手は聞き手も（一度は）それを認識したはずだと思っていた、しかし実際は聞き手はそう認識していないようで、聞き手にあらためてそう認識させる必要があると判断した」といった状況のもとで使用される。

（33）A：明日釣りにでも行こうよ

B：明日雨だズ、さっきも言っただろう

（34）おまえ、学校にいつ行くんだズ。話をそらさないで早く教えろズ。

「*トイウ／テイウ＞*チュー＞ズ」といった音変化を経た引用形式が起源かと思われ、共通語の「ってば」などの用法に類似する。ちなみに、文末詞ではないが、引用形式のザ行音への変化ということでは、当該方言には次のようなものもある。

（35）そこへ一人で行ったザヨ（行ったとはよ（行ったとは驚きだ））

2.7.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

ズは平叙文のほか、疑問文や命令文、勧誘文の主文末でも使用される、汎用の文末詞である。従属節のなかで使用されることはない。

（36）そんなところにポストなんかあるかズ（疑問文）

（37）早く勉強しろズ（命令文）

（38）早く行くベズ（勧誘文）

それぞれ、話し手はそこにポストがないと思っている状況で聞き手があると主張している場合（36）、聞き手に勉強するように言ってもなかなか着手しない場合（37）、聞き手を誘ってもなかなか腰をあげない場合（38）、などに使用される。

なお、ズは間投助詞として使用されることはないが、不満を述べたりする場合など、次のように文末で繰り返して使用されることがある。

（39）A: 今日もまたカンカン照りだね

B: ンダズ（そうだよ）。これでは稲は育たないズ。どうするズ

2.8. ハ

2.8.1. 意味・用法

文末詞ハは、平叙文で使用された場合、「話し手が新たに認識したり得たりした動的事態に関する情報が、話し手自身があらかじめ持っていた期待・予測・情報などと一致しない情報である」ことをマークする。

（40）（雨は夕方からという予報だったのに、昼過ぎに）あれっ、雨降ってきたハー

ここでいう「動的事態」とは、述語がもつ文法的な性質にかかわるものではなく、話し手の現実世界の捉え方によるものである。基本的には動き動詞を述語とする文に後接するが（41）、事態の動きが捉えられていれば状態を表す述語についてもハが使用できる（42）。

（41）ありゃ、いつの間にか桜散ッタハー（動き動詞述語文）

（42）ありゃ、今日はもう3日ダハー（名詞述語文）

2.8.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

ハは、平叙文以外にも、疑問文・命令文・勧誘文等の主文末で使用されるほか、間投助詞として文節末でも使用される。

（43）もう帰るのかハー（疑問文）

（44）早く帰れハー（命令文）

（45）もう帰るベハー（勧誘文）

（46）そしたらヨハー、いつのまにかヨハー、暗くなってきてヨハー…（間投助詞）

（43）は聞き手がもう帰るとは予想していなかった（予想と一致しない。もう少しいてほしい）、（44）は聞き手に帰れと言うのは本意ではない（本意と一致しない。本当はもう少しいてほしい）、（45）は帰ることを促す（誘う）のは本意ではない（本意と一致しない。本当は自分ももう少しここにいたい）、などと話し手が考えている（ふりをしている）ような状況で使用さ

れる文である。

また、間投助詞として使用されるハは、常に間投助詞ヨに後接し、（46）では、各文節末でハを使用することによって、「その事態は話し手の予期しないことであった」ということを、いわば語り全体にかぶせて表現しているものである。

2.9. ス

2.9.1. 意味・用法

文末詞ス（実際にはッスのように促音が入ることが多いので、以下の例文はッを入れて記載する）は共通語の丁寧語形式「です・ます」に相当し、聞き手に対する敬意を表す。小学生などが使用するものではなく、中学の部活動など、タテ社会に入って使用されるようになる形式であるが、大人同士のあいだでは、近所や知り合いの人など、つながりのあるソトの人に対して、ごく日常的に使用される形式である。

（47）それはよかったナッス

（48）（道ばたで近所の人に会って）暑いネッス

なお、「です・ます」は、山形市方言においては、電話における受け手の名乗り部や終結部（「ハイ、渋谷デス」、「失礼シマス」）、儀礼的なことば（アリガドゴザイマス、オバンデスなど）などを除けば日常会話で使用されることはほとんどない。筆者の在籍した時代の高校では、授業で発言する際や先生に対して話す場合も「です・ます」を用いず、スを用いる生徒が多くいた。

2.9.2. 共起する文タイプ・文中での生起位置

平叙文・疑問文・命令文・勧誘文等の主文末で使用されるほか、間投助詞として文節末でも使用される（命令文の場合、書ケのような命令形には後接しないが、ケロ（＜くれろ）のような授与動詞の命令形や書ガッシャイのような敬語の命令形には後接する）。

（49）（先輩に対して）あしたは練習あるかッス（疑問文）

（50）早く来てケロッス（＜クレロッス（ください））（命令文）

（51）（先輩に）早く練習するベッス（しましょう、勧誘文）

間投助詞として使用されるスも、前節のハと同様、常に間投助詞ヨに後接する。

（52）そしたらヨッス、いつのまにかヨッス、暗くなってきてヨッス…（間投助詞）

2.10. まとめ

上で取り上げた9つの文末詞（ケ・ベ・ガ・ジェ・バ・ドレ・ズ・ハ・ス）に、まだ記述を

行っていないモ（共通語の「もの」に相当）、ヨ、ネ、ナの4つの文末詞を加え、さらに共起する文タイプと間投助詞の用法の有無の情報をあわせて整理すると、表1のようになる。

表1　各文末詞の意味・用法と文内分布

形式	意味・用法	従属節内生起	ガモスンネに前接	共起する文タイプ	間投助詞用法
ケ	思い出し・報告	●（C類、連体節）	●	平叙文*	×
ベ	推量・確認要求	●（C類）	×	平叙文*	×
ガ	納得・疑念・質問	●（補文）	※	平叙文**	×
ジェ	思い込み修正	×	×	平叙文	×
バ	驚き	×	×	平叙文	×
ドレ	確認要求	×	×	平叙文	×
モ*	主張	×	×	平叙文	×
ズ	念押し	×	×	汎　用	×
ヨ*	新規情報伝達	×	×	汎　用	●
ネ*	確認	×	×	汎　用	△（共通語的）
ナ*	確認・独り言	×	×	汎　用	△（稀に使用）
ハ	期待外の動的事態	×	×	汎　用	●
ス	丁寧	×	×	汎　用	●

・「●」はその特徴があることを、「△」は限定的にあることを、「×」はないことを示す。
・二重線内部の形式は、「ベ」とガが共起する場合を除き、相互に共起不可能である（3節参照）。
・形式欄の「*」を付した形式は未記述。
・「ガモスンネに前接」欄のガの「※」は、ガモスンネ自身がガを含んでいるもの。
・「共起する文タイプ」欄の「平叙文*」は、（さらに）ガが後接して疑問文になる（納得、疑念、質問を表す）。
・「共起する文タイプ」欄の「平叙文**」はガ自身が疑問文を形成する。
・「共起する文タイプ」欄の「汎用」は、平叙文のほか、疑問文、命令文等に使用される。

表について、以下3点、補足する。

（a）聞き手目当て性（独り言のなかでも使用できるか、聞き手が必ず必要か）ということについて、ケ、ベ、ガ；ナ、ハの5形式は独り言のなかでも使用できるが、他の形式は必ず聞き手がいる場合に使用されるものである。

（b）渡辺（1968）や田野村（1994）は、名詞述語文の場合、終助詞がコピュラのダを介して接続するか否かということを重視するが、上で取り上げた山形市方言の文末詞は、ガについてのみ、

（53）あしたは日曜日｛ダガ／ガ｝

の両者が可能であるほかは（質問ではダガが、納得ではガがよく使用される）、すべてダに後接する。この点、当該方言の文末詞は、形式面では述語からの独立度が高い。ちなみに、当該

方言には、共通語で「だ」を介在させずに使用する「さ」はなく、「のだ」相当のノ（未記述）についても、

（54）あしたそこへ行くノ？

（55）その本、高いノ？

のように、動詞文、形容詞文を述語とする疑問文では使用することができるが、

（56）太郎はまだ学生｛*ナノ／ナンダガ｝？

（57）太郎は全然来ないけど、元気｛*ナノ／ナンダガ｝？

のように、文として完成していない（ダで終止していない）名詞述語文や形容動詞述語文では使用できない（*ダノという形はない）。

（c）方言によっては、ナとネとノのような母音交替や、カとカイとカエのようなゼロとイとエの対立（丹羽2003）によって丁寧さの度合いを表し分ける場合があるが、山形市方言においては丁寧さ（対者待遇）という軸で対立する文末詞はス（ゼロと対立）だけである。当該方言のナとネは意味的に異なるものであり（渋谷2003など）、また、

（58）あれはきれいだったエー

のように感嘆文で使用されるエはあるが（未記述）、これは丁寧さにはかかわらない。

2.11. その他の文末詞

山形市方言の文末詞には、そのほかに、伝聞のドや、ッダ、シタなどがある（いずれも聞き手が必要）。このうちドについては、話し手の態度や判断と他者のそれを合わせて述べるものであるために（当該方言のドは、他者のことばを引用するだけでなく、その内容に話し手の態度や判断を上乗せして述べるものである。渋谷 2011）、またッダとシタの 2 つの形式は、他の文末詞と異なって特定の文末詞とのみ共起するために、相互承接を考える本稿の分析対象からは除いた。ッダとシタの、他の文末詞との相互承接のあり方について、以下、参考までにあげておく。

2.11.1. ッダ

文末詞ッダは、話し手が、相手の質問や疑念を表す発話を受けて、ある根拠や確信に基づいて、ある行動や状態（ッダのスコープのなかにある命題）が生起する／したのは自明のこと、当然のことであると答える場合に使用される。この場合の「自明のこと、当然のこと」とは、話し手にとっては確固とした事態として把握ずみであることを言い、その自明のことを認識していない聞き手に向かって不満を表明するといった例が多い。

（59）A：あの会議、結局誰が行くの？

B：おまえが行かないから、俺が行くことになったッダナー

（60）A：あいつ、怒ってるのかなー？

B：ンダッダズー（そうだよ）、おまえがあんなことをしたんだから

ッダは単独で使用されることはなく、上の例のように必ずズかナが（ふつう長呼されて）後接する。平叙文末でのみ使用され、従属節のなかで使用されることはない。なぜ、ズとナだけが必ず後接して使用されるのかは不明である。

2.12.2. シタ

文末詞シタは、必ず確認要求の「ベ」（2.2）もしくは納得のガ（2.3、いずれも判断未確定系の文末詞）に後接し、話し手（ガシタ）もしくは聞き手（ベシタ）がそれまでもっていた知識や想定を修正する機能を担う（シタがガと「ベ」にしか後接しないのは、会話の場で知識や想定を修正できるのは話し手と聞き手しかいないという機能的な理由による）。具体的には次の通りである。

ベシタは、（聞き手の気づいていない）話し手の想像・想定世界の事物や事態、あるいは、聞き手が（一度は）認識しているはずの記憶のなかの想像・想定世界の事物や事態について、聞き手にその存在を想起・想定させ、当該事物や事態に関する知識を共有することを促す（下線は2.6のドレとの相違点）。

（61）（山形にいて）もしおまえがいま東京にいるとする｛ベ／ベシタ／*ドレ｝（再掲）

（62）みんな行くんだから、私も行ってもいい｛ベ／ベシタ／*ドレ｝（再掲）

また、ガシタは、会話の相手や状況から獲得した情報は、納得せざるをえないものではあるが、それまで話し手のもっていた知識と新たな情報のあいだにはギャップがあり、納得にいたるまでには推論や記憶の検索、新規情報の反芻などの心的操作が必要である／あったことを積極的に表す（下線部は2.3の納得のガとの相違点）。

（63）（クリスマスパーティにでかけようとするときに、友達も外出の用意をしているのを見て）あれっ、おまえも行くんだガシター

（64）A：なんでこんなに早くでかけるの？　まだ9時だよ

B：（時計を見て）えっ、あれっ、まだ9時だガシター。向かいに八百屋のトラックが来たからもう10時ごろかと思った

納得を表す場合でも、話し手のすでにもっている情報と新規情報とのあいだにギャップがなければ、ガシタは使えない。

（65）（カーナビを見ながら行き方を探していて）あっ、わかった、ここを右に曲がればいいの｛ガ／*ダガシタ｝

（66）A：おい、知っている？　あいつ、彼女に告白したらしいぞ
　　B：へー、あいつもとうとう告白した｛ガ／*ガシタ｝。

3. 山形市方言における文末詞の連鎖のあり方

以上、山形市方言で使用されるそれぞれの文末詞の意味・用法と、共起する文タイプ、文中での生起位置を確認したところで、本節では、それぞれの文末詞が文のなかで共起する場合の、その相互承接のあり方を整理することにする。具体的には、3.1で2つの文末詞が共起する場合、3.2で3つの文末詞が共起する場合を整理する。

3.1. 2つの文末詞が共起する場合

2つの文末詞が共起する場合の、その承接のあり方を整理すると、表2のようになる。この表の左の欄の文末詞に、上の欄のどの文末詞が後接するか／しないかをまとめたものである。

表2　2つの文末詞の共起のありかた

前＼後	ケ	ベ	ガ	ジェ	バ	ドレ	モ	ズ	ヨ	ネ	ナ	ハ	ス
ケ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ベ	×		●	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●
ガ	×	×		×	×	×	×	●	●	●	●	●	●
ジェ	×	×	×		×	×	×	×	×	◎	△	●	△
バ	×	×	×	×		×	×	×	×	◎	●	●	●
ドレ	×	×	×	×	×		×	？	？	◎	△	●	△
モ	×	×	×	×	×	×		×	×	●	●	●	△
ズ	×	×	×	×	×	×	×		×	●	△	●	△
ヨ	×	×	×	×	×	×	×	×		●	△	●	●
ネ	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	●	●
ナ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		●	●
ハ	×	×	×	×	×	×	×	×	×	？	●		●
ス	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	？	

● 共起する。
◎ 共起するが、聞き手が二人いると思われるもの（バネの場合、情報を伝える聞き手と、その情報を確認する聞き手）。
△ 文法的には共起しておかしくないが、共通語的である、発話行為と待遇のあり方が衝突するなど不自然なもの。
？ 筆者には不自然であるが、聞いたことがあるように思われるもの。
× 共起しない。
モとズのあいだの太線より上／左は平叙文のみで使用される文末詞、下／右は汎用の文末詞。
二重線は文法的に質の異なるものを区切ったところ。

以下、表について補足する。

（a）表で「◎」を付したもの（すべて第二文末詞がネであるもの）は、最初の文末詞で聞き手に伝え、ネでさらに別の聞き手に確認するといったものである。2つの文末詞のあいだにポーズがなくともよい。次の例の場合、会話の場にいる二人の聞き手のうち、一人はきのう雨が降ったことを知らない人、もう一人はそれを知っている人で、ジェは前者を、ネは後者を目当てとしたものである。

（67）きのうは雨が降ったジェ＋ネ

聞き手が一人だけの場合には使用されない。

（b）表で「△」を付したものは、文法的には共起しておかしくないが、共通語的である、あるいは発話行為と待遇のあり方が衝突するなどして不自然なものである（文法的にというよりも、語用論的に不適切というべきもの。後者については、共通語の命令形にネが後接しないのと類似する）。いずれも第二文末詞がナかスの場合であり、

（68）きのう雨降ったヨナ

は共通語的であり、日常会話ではほとんど使用しない。

（69）＃きのう雨降ったドレッス

などは、聞き手にドレを使用して知識確認を求める行為と、スを用いて聞き手を上位に待遇することが丁寧さという点で衝突するために不自然になっているものである。この点、共通語で、

（70）きのう雨が降ったじゃないですか

のように、「じゃないか」と「です」が共起するのとは異なっている。ドレによって確認を要求する度合いが共通語の「じゃないか」によるそれよりも強く、スの待遇価も「です」のそれよりも高いためにクラッシュするということなのかもしれない。

（c）表で「？」を記したもののうち、ドレについては、確認要求を一度行い、それでも思い出さないという場合に、

（71）おまえにちゃんと言ったドレ＋ズー

のように言うことができるように思われる（ズがなくても言える）。一方、ヨについては、

（72）??おまえにちゃんと言ったドレ＋ヨー

は不自然で、疑問文に使用される文末詞ヤを用いて、

（73）おまえにちゃんと言ったドレ＋ヤー

というのがふつうである。

（d）同じく表で「？」を記したもののうち、ナとネ、ハ、スについては、その共起のあり方は、基本的に、

（74）夏が来た｛ナ／ネ｝＋ハ＋ッスー（もう夏が来ましたね）

のように、{ナ／ネ}＋ハ＋スであるものの、次のように、その順番が変わる場合があるようである。一部、命令文と疑問文の例もあげる。

（75）太郎は行ってしまった｛ネ＋ハー／??ハ＋ネー｝

（76）太郎は行ってしまった｛ナ＋ハー／??ハ＋ナー｝

（77）残りは全部食べてケロ｛?ナ＋ハ／ハ＋ナ｝（ケロ＜くれろ）

（78）残りは全部食べてケロ｛ネ＋ハー／??ハ＋ネー｝（命令形に後接するネについては渋谷2003 参照）

（79）（旅行に行くと言っていた人を見かけて）あれ、もう旅行から帰ってきたのか｛ハ＋ッスー／?ッス＋ハー（＞ッスァー)｝

この点については、ナとネがもつ意味・用法がひとつなのか、それとも複数なのかといった分析などを踏まえたうえで、もう少し細かく検討する必要がある。

3.2. 3つ以上の文末詞が共起する場合

次に、同じように、3つの文末詞が共起する場合の、その承接のあり方を整理すると、表3のようになる。なお、「ジェ・バ・ドレ・モ」、「ズ・ヨ」、および「ネ・ナ」は共起ということについてほぼ同じ振る舞いをするので、表ではそれぞれバ、ズ、ネで代表させたところがある。記号と線の意味は、第一形式のあいだを区切るのに三重線を用いたほかは、表2の場合と同じである。

4つ以上の文末詞の連鎖のあり方は、たとえば、ケ＋ベ＋ガの3形式連鎖の場合、意味・用法の面で先行形式と衝突しないがぎり、次のように、それよりも右側の形式が後接することになる。

4形式：（ケ＋ベ＋ガ）＋ズ

5形式：（ケ＋ベ＋ガ＋ズ）＋ネ

6形式：（ケ＋ベ＋ガ＋ズ＋ネ）＋ッス

7形式：（ケ＋ベ＋ガ＋ズ＋ネ＋ッス）＋ハ

4. まとめ：山形市方言の文末詞の相互承接

4.1　相互承接のあり方

上で整理したところに基づいて、形市方言の文末詞の相互承接のあり方を、田野村（1994）などと同様の方法でまとめると、図のようになる。

以下、図について、若干説明を加える。

表3　3つの文末詞の共起のありかた

第1形式	第2形式	第3形式											
		ベ	ガ	ジェ	バ	ドレ	モ	ズ	ヨ	ネ	ナ	ハ	ス
ケ	ベ		●	×	×	×	×	●	●	●	●	●	●
	ガ	×		×	×	×	×	●	●	●	●	●	●
	ジェ	×	×		×	×	×	×	×	◎	△	●	△
	バ	×	×	×		×	×	×	×	◎	●	●	●
	ドレ	×	×	×	×		×	?	?	◎	△	●	△
	モ	×	×	×	×	×		×	×	●	●	●	△
	ズ	×	×	×	×	×	×		×	●	△	●	△
	ヨ	×	×	×	×	×	×	×		●	△	●	●
	ネ	×	×	×	×	×	×	×	×		×	●	●
	ナ	×	×	×	×	×	×	×	×	×		●	●
	ハ	×	×	×	×	×	×	×	×	?	●		●
	ス	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	?	
ベ	ガ			×	×	×	×	●	?	●	●	●	●
	ズ		×	×	×	×	×		×	●	△	●	△
	ヨ		×	×	×	×	×	×		●	△	●	△
	ネ		×	×	×	×	×	×	×		×	●	●
	ナ		×	×	×	×	×	×	×	×		●	●
	ハ		×	×	×	×	×	×	×	?	?		●
	ス		×	×	×	×	×	×	×	×	×	?	
バ	ネ	×	×	×		×	×	×	×		×	◎	◎
	ナ	×	×	×		×	×	×	×	×		●	●
	ハ	×	×	×		×	×	×	×	?	?		●
	ス	×	×	×		×	×	×	×	×	×	?	
ズ	ネ	×	×	×	×	×	×	×			×	●	△
	ナ	×	×	×	×	×	×	×		×		△	△
	ハ	×	×	×	×	×	×	×		?	?		△
	ス	×	×	×	×	×	×	×		×	×	?	
ネ	ハ	×	×	×	×	×	×	×	×		×		●
	ス	×	×	×	×	×	×	×	×		×	?	

（a）図の最上段について、ナとハは独り言でも使用できるので（2.10（a））、右側を「表出性」としている。文末詞が会話のなかで使用される場合に限定すれば、「表出性」は「聞き手目当て性」とすべきところである。ただし、報告のケや判断確定系の文末詞ジェ、バ、ドレ、モなどもすべて聞き手が必要であるので、このスケールは、左側の文末詞ほど命題目当て性と表

図　山形市方言の文末詞の相互承接

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">命題目当て性大　←</td><td colspan="4">→　表出性大</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">平叙文に使用される文末詞</td><td colspan="4">汎用される文末詞</td></tr>
<tr><td rowspan="4">本だ
赤い
行く</td><td rowspan="4">ケ</td><td colspan="2">判断未確定系</td><td rowspan="3">ズ

ヨ</td><td rowspan="2">ネ</td><td rowspan="4">ハ</td><td rowspan="4">ス</td></tr>
<tr><td>ベ</td><td>ガ</td></tr>
<tr><td colspan="2">判断確定系</td></tr>
<tr><td colspan="2">ジェ
バ
ドレ
モ</td><td>ナ</td></tr>
</table>

出性を複合的に述べる度合いが強く、右側の文末詞ほどその命題目当て性が弱くなり、表出性のみを純粋に表現する度合いが強くなると読むべきものである。

（b）図の中央の太い縦線（実線・点線）は、平叙文にしか後接しない文末詞と、すべての文タイプで汎用される文末詞をわけるものである。線の左側が平叙文にしか使用されない文末詞であり、右側が平叙文のほか、命令文や疑問文などにも使用される文末詞である。

（c）ケの後ろ、ズ・ヨの前に位置する文末詞は、判断未確定系と判断確定系（仮称）にわかれる。

（d）図のタテの並び（各セル内の形式）は対立項を表し、文を構成する場合には、各セルの形式のなかからひとつを選ぶという関係にある。

（e）ヨコの並びは共起関係を示す。ただし、個々のセル内のいずれかの形式を必ず選ばなければならないというものではなく、ひとつもしくは2つ以上のセルをスキップしてもよい（たとえば「本ダケッス」の場合には、ケとスのあいだのセルにある形式はすべてスキップされている）。また、使用する文末詞の選択にあたって、当該文末詞の意味・用法が、先行する語や文末詞の意味・用法と相容れない（衝突する）場合には、選択されることはない（# ドレ＋スなど。3.1（b）参照）。

（f）判断確定系の文末詞ジェ・バ・モは、ズ・ヨと共起しない（ドレも、筆者の内省ではズ・ヨと共起しにくい）。表ではこのことを太点線で示した。

4.2　相互承接の特徴

さて、上の図および個々の文末詞の担う意味・用法を踏まえれば、山形市方言の文末詞の相互承接／体系は、次のようにまとめることができると思われる。

① 文末詞の全体的な構造

基本的には、田野村（1994）の言う、3類からなる「終助詞の共通体系」を拡張したものと

なっている。渡辺（1968）などの先行研究が共通語について述べたところと同じように、左側には「判断とのつながり」（渡辺の用語。図では「命題目当て性」とする）をもった文末詞が、右側にはもっぱら表出性（会話では聞き手目当て性）を担う文末詞が配置される（ただし4.1（a）で述べたことに注意）。

② 左側の文末詞（平叙文と共起する、「判断とのつながり」をもった文末詞）

左側の、平叙文でしか使用されない文末詞には、エビデンシャルやテンスを表すケのほか、話し手が、その命題を確定したものとして捉えているか（判断確定系）、未確定のものとして捉えているか（判断未確定系）、また判断確定系の場合、その命題が表す事態・情報を話し手がどのように捉えているかを示す文末詞がある。判断確定系の文末詞を意味・用法の分担（対立）といった点で見ると、ジェ＝正しい情報、バ＝驚くべき情報など、とくに系統だった対立をなしているわけではなさそうで（＝比較的開いた体系である）、今後もここに属する文末詞が生まれては消えていく可能性がある。

③ 右側の文末詞（汎用される、表出性を担う文末詞）

右側の、さまざまな文タイプに汎用される文末詞は、会話の中で使用される場合、もっぱら、聞き手にいかに出来事や状態、質問、行為指示などを伝えるか（ズ・ヨ、ネ・ナ、ハ）／聞き手をいかに遇するか（ス）にかかわる文末詞である。ただし、ズとヨは、構文的にはネ・ナ・ハ・スと同様に汎用されるものの、意味的には（ジェ等と共起しないという点で）判断確定系の文末詞と対立し、それらとあわせてひとつのカテゴリーを構成するようにも見える。ズとヨは、左側の文末詞と右側の文末詞の中間的な性格を有する（両者の性格をあわせもつ）ものと考えるのがよいように思われる（「よ」の両面性に関しては、丹羽2003: 40-41にも指摘がある）。

なお、平叙文で使用されるハは「新たに認識したり得たりした動的事態に関する情報が、話し手自身のもっている（もっていた）期待・予測・情報などに一致しない情報である」ことを伝えるもので、一見、判断とのつながりがあるように思われる。しかし、命令文などで使用される場合のハもあわせて考えれば、重点は聞き手への伝え方にあるものと思われる。ハが担っているのは、「いま伝えていることは私（話し手）の思いとは異なる」「あなたにこのようなことを伝えるのは私の本意ではない」「淡々と伝えているのではなく、恐縮している、残念だと思いつつ伝えている」等の、伝え方の様式であろう。

以上、山形市方言の汎用される右側の文末詞を、共通語や東京方言のそれと比較すれば、山形市方言のズ・ヨとネ・ナに相当するものは共通語にもあり（「よ」と「ね」）、またスに相当するものは東京方言にもあって（「っす」）、ハのみが山形市方言に特徴的な汎用の文末詞だということになる。ただし、スと「っす」については、山形市方言のスが必ず文の最末尾に現れる点で（「おれも行くヨ＋ッス」）、東京方言とは異なっている（「おれも行くっす＋よ」）。

④〈参考〉間投助詞の相互承接

関連して、文末詞が間投助詞として使用された場合の承接のあり方も確認しておこう。

山形市方言では、文末詞が間投助詞として使用された場合に、複数の間投助詞が共起する場合があるが、その場合にも、基本的には上の相互承接のあり方が維持される。

（80）長い時間立ってたからみんな疲れてヨ＋ハー、そのあとは仕事にならなかった

（81）きのうヨ＋ッス、みんなでヨ＋ッス、花見に行ってヨ＋ッス…

（82）きのうはみんな早く帰ってヨ＋ハ＋ッスー、仕事が最後まで終わらなかった

ただし、文末詞の場合にはヨを介さずにハやスを使用することができたが、間投助詞の場合には、2.8.2（ハ）、2.9.2（ス）でも述べたように、ハやスを使用するためには必ずヨに後接させる必要がある。山形市方言の間投助詞は基本的にヨであり、その上に、話し手の期待・予測・情報などとの不一致（ハ）、聞き手に対する丁寧さ（ス）などのモーダルな意味をかぶせて発話を構成していると考えることができる。

5. おわりに

以上、本稿では、山形市方言で使用される文末詞について、個々の文末詞の意味と用法、生起する文タイプ、文中での生起位置を確認しつつ（2節）、主に平叙文についての相互承接のあり方を整理した（3節）。その結果、当該方言の文末詞は、

① テンス・エビデンシャル等を表すケ

② 判断とのつながりをもった、平叙文にのみ使用される文末詞（判断不確定系のベとガ、判断確定系のジェ、バ、ドレ、モ）

③ 判断と聞き手への伝え方の両者にかかわる汎用の文末詞（ズとヨ）

④ もっぱら聞き手への伝え方にかかわる汎用の文末詞（ネ・ナ、ハ）

⑤ 聞き手への待遇のあり方を示す汎用の文末詞（ス）

といった順番で相互承接を構成するということを確認した（4節）。

ただし、上で見てきたように、ケやネ・ナなど、その意味や用法が複数ある（可能性がある）形式もあり、ケ$_1$、ケ$_2$のように、さらに細かくわけて考えるべきところがあるかもしれない。文末詞モやヨについても、個別に記述を行う必要がある。その他、疑問文に後接する特徴的な文末詞（ヤ）もある。それぞれの文末詞が担う文法カテゴリーの（類型論的な）特徴づけなどとあわせて、今後の課題とする。

参考文献

井上史雄・吉岡泰夫監修（2004）『北海道・東北の方言―調べてみよう　暮らしのことば―』ゆまに書房.

沖裕子（2015）「松本方言終助詞の文法体系―談話研究の基礎―」『信州大学人文科学論集』2: 233-250.

渋谷勝己（1999a）「文末詞『ケ』―三つの体系における対照研究―」『近代語研究第十集』武蔵野書院，pp.205-230.

渋谷勝己（1999b）「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1: 6-15.

渋谷勝己（2000）「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2: 8-17.

渋谷勝己（2001a）「山形市方言における確認要求表現とその周辺」『阪大社会言語学研究ノート』3: 20-32.

渋谷勝己（2001b）「山形市方言の丁寧語ス」『阪大社会言語学研究ノート』3: 49-60.

渋谷勝己（2002）「山形市方言における談話マーカ『ホレ・ホリャ；アレ・アリャ』」『阪大社会言語学研究ノート』4: 131-142.

渋谷勝己（2003）「山形市方言における命令形後接の文末詞ナ・ネ・ヨ」『阪大社会言語学研究ノート』5: 114-127.

渋谷勝己（2004）「山形市方言の文末詞バ―ヨと対比して―」『阪大社会言語学研究ノート』6: 170-18.

渋谷勝己（2005）「山形市方言のモダリティ形式『ッダ』」『阪大社会言語学研究ノート』7: 51-61.

渋谷勝己（2006）「山形市方言の文末詞の相互承接」『方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究』（2002～2005年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書。課題番号14310196、研究代表者 大西拓一郎），pp.81-90.

渋谷勝己（2008）「山形市方言の文末詞ジェ―ヨ・ズ・バと対比して―」『阪大社会言語学研究ノート』8: 1-13.

渋谷勝己（2011）「山形市方言における引用・伝聞形式テとド」『阪大社会言語学研究ノート』9: 1-13.

渋谷勝己（2012）「山形市方言の文末詞ヤ―ヨと対比して―」『阪大社会言語学研究ノート』10: 78-88.

渋谷勝己（2014）「方言研究と通言語的研究」定延利之編『日本語学と通言語的研究との対話―テンス・アスペクト・ムード研究を通して―』くろしお出版，pp.97-145.

渋谷勝己・澤村美幸・大久保拓磨・松丸真大（2006）「山形市方言の文末詞シタ―ベシタ・ガシタの用法にもとづいて―」『阪大日本語研究』18: 1-21.

鈴木英夫（1976）「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』53-11: 58-70.

田野村忠温（1990）「補説A 終助詞」『現代日本語の文法Ⅰ』和泉書院，pp.143-150.

田野村忠温（1994）「終助詞の文法―江戸語資料に見る終助詞の体系性―」『日本語学』13-4: 94-112.

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版.

丹羽一彌（2003）「日本語『終助詞』の分類」『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』37: 27-44. 信州大学人文学部.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

三宅知宏（1996）「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111-122.

渡辺実（1968）「終助詞の文法論的位置―叙述と陳述再説―」『国語学』72: 127-135.

（『阪大社会言語学研究ノート』はhttp://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/SLN/index.htmlで公開。）

（文学研究科教授）